
咲-Saki- 《風神録》

朝霞リョウマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咲 - S a k i - 《風神録》

【Nコード】

N0318X

【作者名】

朝霞リヨウマ

【あらすじ】

鶴賀学園高等学校が共学になった年の春、一人の少年が入学した。彼の名は風祭御人。この物語は、高校麻雀において無名校であった鶴賀を全国へと導き、後に『風神』と呼ばれた少年の青春の記録である。（誇大表現有）

東一局『春が来たりて』（前書き）

とりあえずモモとの話が書きたかった。

後悔はしてないが公開はすることにした。

東一局『春が来たりて』

春である。まごうことなき春、spring バネではなく春である。

桜の花が満開に咲き誇り、新たな生活の始まりの季節。冬眠していた土の中の動物たちが活動を始める生き物の季節。優しい太陽が照らす暖かな季節。

きつと、そんな春だからなのだろうか。

「なあなあ！ お前もそうなんだろ！？」

入学式もHRも終わり、後は帰宅するだけとなった直後、突然前の席の奴が振り向きざまにそんなことを言ってきたのも、きつと春のせいだろう。

「……はあ？」

唐突にこんな始まり方で申し訳ない。いや、本当に唐突で自分ですらよく分かっていないのだから、勘弁願いたい。

咲 - S a k i - 《風神録》

東一局 『春が来たりて』

「……いきなり何だ？」

「何って、さっき自己紹介しただろ？ 出席番号10番、加賀太郎^{かが たろう}だ！」

「名前はいいから。さっきの言葉の意味だよ」

いや、確かに名前も覚えていなかったが。

「だから、お前もここが元女子高だから入学してきたんだろ？」

加賀は何故か何かを期待するような視線で、そんなことを尋ねてきた。

私立鶴賀学園。何の変哲もないこの私立の学校は、去年まで女子高だった。それが今年から共学となり男子生徒も受け入れるようになった。

しかしそこは元女子高。やはり肩身が狭いと感じるからか男子からの入学希望者は少なく、加えて男子は新入生しかない。結果、この学園の男子生徒は全体の二割にも満たないのだ。

このクラスでも三十人強の生徒の内、男子は片手で数えられる程度。きつと加賀はそんな状況になることを逆に望んで入学してきたのだろう。

あれだ、ハーレム願望ってやつかな。

「いや、違うけど」

気持ちは分からんでもないけど。

「違うのか!？」

何故か凄い勢いで驚かれた。

「お前、ここに男子が入学する理由なんてそれしかないだろ……!」

「いやいやいや、お前は高校に何を求めて入学したんだよ」

初対面で早くもこの目の前の少年の将来が心配になってきた。

……いや待てよ、同じような理由で大学、企業と進んで行けばある意味で安泰なのかもしれない……。

まあ目の前の少年の将来についての考察はこの辺にしておこう。

5

「まあ、別に聞かれて困るような理由じゃないけどさ。俺がここに入学したのは」

それを口にしようとした途端、残った生徒もまばらとなった教室の前の扉が勢い良く開かれた。

開かれた長方形の枠の中に納まるようにして立つのは、一人の女子生徒。女子にしてはやや高めの身長に、鋭い眼光。下級生の教室に乗り込んできているというのに堂々としたその様子は、凜々しいという言葉がよく当てはまった。

……まあ。

「突然失礼する。三年の加治木だ。風祭御人はいるか？」

知り合いなわけですが。

「……あの人にこの学園に入学しろって言われたからだよ」

見紛うことなき我が従姉弟、加治木ゆみとの久々の再会だった。

十

「まさか一年生の教室に乗り込んでくるとは思わなかったよ、ゆみ姉」

背後から聞こえてくる加賀の「お前は既にそちら側の人間だったのかー！」という血涙と共に放たれた叫びを遮断するように、後ろ手に教室の扉を閉めた。

「む、迷惑だったか？」

若干だが不安そうな声を出す。ゆみ姉。見た目通りの凛々しい女性であることは間違いないのだが、時折見せるこっぴどい表情が本当に可愛い。何気に初恋の女性だったりする。

「いや、変な奴に絡まれてたところだから逆にありがたかったよ」

別に悪い奴ではないとは思うのだが、無意味に絡まれるのは勘弁

願いたいところだ。

「そうか。こうしてわざわざ来てもらったにも関わらず、ただ呼び出すだけでは悪いと思ってな、こうして迎えに来たんだ」

そう言いながら歩き始めるゆみ姉。きつと付いて来いという意味であろうから、隣に並んで廊下を歩く。

「それにしてもビックリしたよ。突然メールが来たかと思ったくらいきなり『鶴賀学園に入学してくれ』だったんだから」

ゆみ姉からのメールが来たのは願書提出期限ギリギリの時期だったので、そのときには既に志望校が決まっていた。ただ特に理由も無しに「一人暮らしがしたいから」という理由で決めた志望校だったので、担任を説得するのは案外簡単だった。むしろその後の受験勉強の方が大変だった（鶴賀学園の方が偏差値が高かったのだ）。

「その件に関してもすまなかった。……というより、そういえば私はお前に理由を何も説明してなかったな」

「うん」

本当に今更な話ではあるが、ゆみ姉からのメールには鶴賀学園入学の旨しか書かれておらず、その理由に関しては一切明記されていなかった。

「それに関してもすまなかったが……よくそれでここに入学してくれたな。何も不審に思わなかったのか？」

「別に、特に行きたい高校があったわけでもないし。何よりゆみ姉

からの頼みを俺が無下にするわけないでしょ」

聞かなかった俺にも責任はあるわけだし。

「……そうか、ありがとうな、御人」

ゆみ姉は撫でるようにポツと俺の頭に手を置いた。昔はよく頭を撫でられたものだが、今こうして高校生になってまで撫でられるのは、懐かしいような恥ずかしいような子供扱いが悔しいような、複雑な気分である。

それ以前に、未だに身長が負けているのが悔しい。確かに俺も男子にしては大きい方ではないが、それでも年上とはいえたった一つしか変わらない女子に身長で負けるのは色々と思うところがあるのだ。……せめてこの高校三年間で160cmにはなりたい。それでも恐らくゆみ姉には追いつかないだろうが。

「着いたぞ、ここだ」

ゆみ姉に頭を撫でられて悶々としている間にいつの間にか目的地に到着していたようだ。

そこはとある教室の目の前だった。

「……麻雀……部？」

つまり麻雀部の部室ということだろう。

「連れてきたぞ」

ノックも無しに扉を開けながら、ゆみ姉は部室の中に入っていった。その後ろについて行くように俺も部室の中に入る。

「加治木先輩、こんにちは」

「おー、ゆみちゃん、その子かー？ ずっと言ってた新入部員候補生はー」

中には二人の女子生徒がいた。一人目、黒髪をポニーテールにした若干生真面目そうな女子生徒。ゆみ姉のことを先輩と呼んでいることから、三年生ではないだろう。恐らく二年生。二人目、赤みがかった髪の毛、何故か陽気そうな印象を受ける女子生徒。言動から察するに恐らくゆみ姉と同学年、つまり三年生。

「って、新入部員候補生？」

「ゆみ姉、もしかして……」

「察したか」

「そうだ、とゆみ姉は頷く。」

「お前には、この鶴賀学園麻雀部に入部してもらいたいのだ」

東一局『春が来たりて』（後書き）

更新速度は亀より遅いかもしれない。

とりあえずストックがあるので、それを小出ししてく感じで。

そこ、姑息とか言わない。

知ってるから。

東二局『鶴賀学園麻雀部』（前書き）

Q、何本も小説書いてるみたいだけど、キチンと完結させられるの？

A、そういう質問はマネージャーを通してください。

東二局『鶴賀学園麻雀部』

「えっと、本日よりこの鶴賀学園に入学しました、風祭御人です」

とりあえず自己紹介という流れになったので、よろしくお願いますと先輩方に向かって頭を下げる。

「私は津山睦月、二年だ」

「三年で麻雀部部长、蒲原智美だ」

津山先輩に蒲原先輩ね。おk把握。

「それでゆみ姉、わざわざ俺をここに入学させた理由って、この麻雀部のためってことでいいの？」

「うむ」

頷くゆみ姉。でも、どうしてわざわざこんなことを？ 普通に新入生を勧誘すれば二・三人ぐらい集まりそうなものだと思うのだけど。

「それが集まらないんだ」

「へ？」

一昔前ならいざ知らず、麻雀人口が急増しつつある昨今だったら麻雀部員なんていくらでもいてもおかしくないような気がする。それなのに、ゆみ姉は部員が集まらないと言う。

「この鶴賀学園は知っての通り進学校。部活動よりも勉強に力を入れてる。よって男子だったら裾花^{すそはな}、女子だったら風越女子^{かぜこしじょし}などの麻雀強豪校へと進学して行ってしまっただ」

あー、なるほど。そう言われてみればそうだ。

「そもそもこの学校には二年前まで麻雀部がなかった」

あれー！？

「私と蒲原が創設して以来、わずかな人数で細々と活動をしていたわけなのだが……」

「大会出場のための規定人数が五人のため、大会にも出場できず」

「大会どころか部活自体の存続の危機だったりするんだな」

ゆみ姉以下先輩方の分かりやすい状況説明。なるほど、部活を存続させるためにも、とりあえず何が何でも部員の確保をしておきたかったわけだ。

「こんな個人的な理由のためにわざわざ志望校を変更してもらって

「すまないと思ってる。でも」

「あ、もういいよ、ゆみ姉。それ以上は」

今にも頭を下げようとしていたゆみ姉を止める。

「それにさっきも言ったけど、ゆみ姉の頼みを俺が無下にするわけがないでしょ？ 前の志望校に思い入れがあったわけじゃないし、ぶっちゃけ個人的には何処の高校でもよかったんだ」

中学高校問わず先生に聞かれたら怒られそうな発言ではあるが、一人暮らしさえできれば何処でもよかった。

「あのゆみ姉が、部員確保のためとはいえ俺を頼ってくれたことが純粹に嬉しいんだ。だからそんなに『すまない』とか言わないで大丈夫だよ」

「……そうか。本当にありがとうな、御人」

「いやいや、良い子が入ってくれたねー」

「これで部活は存続できそうですね」

おや？

「ねえ、今部活の規定人数は五人って言うってたよね？ それだとまだ足りないんじゃない？」

俺が麻雀部に入部したとして、ゆみ姉、蒲原先輩、津山輩で合計四人。規定人数に一人足りていない。

「それだったら問題ない」

「私の幼馴染を強制入部させるから、これで五人になるのだよ」

なるほど、強制入部ですか。……突っ込みべきところだったのだろうか。まあ、俺も似たり寄ったりな立場だし、あえて何も言わないでおこう。

「それで御人、改めて聞きたいのだが、麻雀部に入部してくれるか？」

そんなことを尋ねてくるゆみ姉。まあ、特にやりたかった部活があるわけではないし、放課後もただゲームしたり漫画したりしているだけだし。たった一度きりの高校生活だ。麻雀とはいえ、部活に青春を捧げてみるのも悪くないだろう。

というわけで、俺の答えは一つ。

「もちろん。一年、風祭御人、麻雀部に入部させてもらいます」

こうして晴れて俺は鶴賀学園麻雀部の新入部員となり、新たな高校生活をスタートしたわけである。

……なのだが、早速問題発生である。

「大会に出場できない!?!」

全国高校生麻雀大会。夏に行われるこのインターハイと呼ばれるこの大会は、全国から一万人以上の高校生が目指して出てくる。本戦は毎年テレビ中継もされる、云わば『麻雀甲子園』。このインターハイの県予選が八月に行われるわけなのだが……。

「出場できないってどういうこと?」

トンツと一索をツモ切りしながらゆみ姉に尋ねる。

「ロン、チッチー7700だ」

「げ」

「終了、だな」

言い訳にするわけではないが、話ながら打っていたらゆみ姉に直撃してしまった。流石に焼き鳥ではないし、飛びもしなかったものの、結果最下位。長年家族や親戚で麻雀を打っていたのだが、麻雀暦二年のゆみ姉に何故か勝てない。こうしてまた俺の連敗記録が更新されていくのであった。

……俺、弱いのかな……?」

半荘をはつかん終え、一息吐いたところで先ほどの会話を再開する。

「それで、どうして大会に出場できないの?」

部員はちゃんと五人集まったんだ。これで部活は存続するし、県予選の団体戦にだって出場できるはずだ。

「それが、単純な話だったりするんだなー」

「団体戦は男子と女子で別れてるんだ」

「……あー」

本当に単純な話だった。そりゃそうだ。普通に男女別に決まってるよな。

とりあえず、男子は俺一人しかいないから今年の県予選はほぼ絶望的だろう。ゆみ姉たちが必死になってようやく一人二人集まるよな状況なのだ。流石に今から男子を四人集めるのはちとキツイものがある。

「一人は部長の幼馴染が入ってくれるとして、問題は最後の一人の女子部員ですね」

牌を並べて片付け、点棒を整理しながら津山先輩は溜息を吐いた。昨今の各校の麻雀部であつたら各部室に全自動雀卓が配備されているのだろうが、二年前に出来たばかりで規定人数ギリギリの我が麻雀部にそんな高価なものを買うほどの部費が落ちないため、普通に雀卓である。わざわざ自分で山を積まないといけないのは若干面倒ではあるが、こう、自分の手でジャラジャラとかき混ぜるのは個人的に好きだったりする。

「今までにも一応勧誘活動はしてきたんですよね？」

「ああ。地道に周りに声をかけたり、張り紙を貼ったりしてきたさ。ただ、最近はおっばらこれだな」

そう言っつてゆみ姉たちがカバンから取り出したのは……ノートパソコン？

「それ、自分たちの？」

「ああ、全自動雀卓が買えないのに、ノートパソコンを二つも買う余裕があるものか」

「もっともでございませう。」

というか、いいなーノーパソ。普段から漫画やらゲームやら買ってる俺にそんな高価なものを買う余裕など雀の涙ほどもございませんよ。

「麻雀部のサーバーを校内LANに繋いでプレイヤーを募っているんだ」

「それで、なかなか良さそうな人材がいたら勧誘って流れかなー」

なるほど。校内を歩いて探すより、ネット麻雀で麻雀が出来てそれなりの人物を効率よく探せるわけだ。

「それで、今までの収穫は？」

「「「……………」」」

いや、まあこの部活の現状を見れば言わずもがな、なんだけど。

「これからも地道に続けていくしかないんだろな」

こればっかしはどうしようもない。俺みたいにすんなり強制入部って流れの方がおかしいからな。誰かに無理矢理入部させたところで、いつ辞めるか分からない。夏の全国が終わるまでのその場しのぎって考え方もないこともないが、これから三年間部活を続ける身としては出来るだけ長く部活を続けてくれるような人に入ってもらいたいものだ。

「それで、先輩方がネット麻雀で新入部員を探している間、俺は一体何をしていればいいんでしょうかね？」

一人だけノートパソコンを持っていないのですが。

「……………」

「…………宿題でもしていればいいんじゃないかなー」

「…………はい」

…………まあ、進学校だけあって授業のレベルが高く、出される課題が多かったりするのでもまた事実。

こうして、放課後麻雀部では半荘をやった後は一人寂しく課題や勉強をすることとなった。

…………結構、寂しかったりするんだよ。

東二局『鶴賀学園麻雀部』（後書き）

未だにモモちゃん不在。

五話ぐらい辺りまでまともに出てこないからモモちゃんファンの人は今しばしお待ちを。

東三局『Default Player』（前書き）

サブヒロイン候補

のどっち キャプテン ともきー 神代

感想で聞かれたので書いてみた。

おっばい星人ですが何か？

東三局『Default Player』

高校に入り、生まれて初めて参加する部活動。そこで俺を待ち受けていたのは、厳しい先輩と先生のしごき、深まる友人との絆、そして現れるライバルたちを退け、目指せ世界への道　　！！

なんてことがあるはずもなく。

基本的に、我が麻雀部の活動は味付けが薄めだった。

咲 - S a k i - 《風神録》

東三局 『Default Player』

カチ、カチカチ……

カリカリ……

二種類の音が響く麻雀部の部室。前者の音は、ノートパソコンを使って新入部員を募っているゆみ姉たちがクリックする音。後者の音は、ただひたすら出された課題を片付ける俺のシャーペンの音。我らが麻雀部はいつものように半荘を終え、いつものようにそれぞれの活動をするのであった。

「…………ふう」

クルクルつとシャーペンを指で回してから机の上に置き、ググッと背伸びをする。

(ダメだ、斜方投射とか何が何やら)

相変わらず理数系は苦手だ。あとでゆみ姉に教えてもらおう。

ということとでちつとばっかし休憩。コーヒーでも入れることにしよう。

「コーヒー飲む人いますかー？」

全員手を上げたので、マグカップを四つ用意してコーヒーを入れる。俺とゆみ姉はブラック、部長は砂糖五杯、津山先輩は一杯つと

……

「はい、ゆみ姉」

「ん、ありがとう」

全員にコーヒーを配り終わってから自分の分に口を付ける。

「そっちの調子はどんな感じ？」

「ああ、なかなかいい人がいたぞ」

「え？ マジ？」

今まで見つからずに今になって見つかったということは、俺と同じ新入生かな？

ゆみ姉の後ろからノートパソコンを覗き込む。ゆみ姉が指差すそこには『Default Player』の名前。

(どれどれ……)

そのままゆみ姉の後ろから対局を観戦する。

十

南二局で対局は終了した。下家しもがめが無用心な振込みにより飛んでしまったのだ。結果、三位だった対面の逆転勝利で終わったのだが……注目すべきは振り込んだ下家しもがめでも、逆転勝利を収めた対面でもない。

(ゆみ姉が二位、か……)

こう言つてはあれだが、ゆみ姉は手加減なんて器用な真似は出来ない。だから例え相手が初心者であっても全力で麻雀を打つ。時の運はあるものの、そんじょそこらの経験者ではゆみ姉から一位は簡単に奪えない。

そんなゆみ姉が『直撃していないのにも関わらず』ただの満貫マンガンで逆転されてしまったのだ。

そのような状況になってしまった最大の理由。それが……。

(上家かみちや……『Default Player』……)

決して素人などではない手堅い打ち回し。時には他家に振り込ん

でまでゆみ姉の和了を阻止し、降りるべきところでは降りる。派手な打ち筋ではないが着実に点数を稼ぎ、二位の位置からトップのゆみ姉を抑えていたのだ。

華がないと言ってしまったえば、それで終わり。

けれど。

何故か、その打ち方と性格に、惹かれるものがあった。

「いい打ち手だと思わないか？」

「うん……華はないけど堅実だ……ねえ、ゆみ姉」

俺の言おうとしたことが分かったらしく、ゆみ姉は頷いた。

しかしゆみ姉が行動に移す前に、部長が動いていた。

『カマボコ：よかつたら、麻雀部に入部してみない？』

……部長、ハンドルネームが『カマボコ』ですか。いやまあ、別にいいんですけど。

部長直々の勧誘の言葉。

『Default Player：あまり興味がないので』

『かじゆ：そこをなんとか』

そっけない返事に、ハンドルネーム『かじゆ』ことゆみ姉が喰ら

いつく。部員が少ないのは事実。でも、たとえどんな人でも入部してもらいたい現在の状況でも、優秀な人材ならば欲しいに決まっている。

しかし、帰ってきた返事はとても不思議なものだった。

『Default Player：あなたたちは、私を見つけれない』

「…………え？」

この言葉は一体…………。

『システム：Default Playerが退室しました』

「あー！」

呆気にとられている間に退室されてしまった。

「引き止められなかったなー」

部長がいつものように「ワハハ」と笑うが、若干残念そうだ。

「ねえ、ゆみ姉、これってどういう意味なんだろ……………」

「……………」

ゆみ姉からは答えは返ってこない。

結局、その日はもう『Default Player』は姿を現さなかった。

十

「……………」

気が付けば、もう夕方だった。

ゆみ姉たちや部長たちは先に帰り、部室に残っているのは俺だけ。

「はあ」

一人暮らしのため門限なんてあるはずもないが、流石にそろそろ帰ることにしよう。

部長から預かっていた鍵を使い、戸締りをしてから昇降口へ向かう。

誰もいない廊下。一人歩きながら考えるのは、さつきからずっと一人で考えていたこと。

『Default Player』が残っていた最後の言葉。

『あなたたちは、私を見つけれない』

一体どういう意味なのだろうか。いや、確かにネット麻雀なんかで個人の特定なんか出来ないし、見つけれないっちゃ見つけれないんだろっけど。

けれど、あの言葉には何か別の意味が含まれているような気がする。

「……………ん？」

それは、本当に直感だった。核心なんて何処にもない。

けれど、俺は本能的に左を向いた。

そこは一年A組の教室。開きっぱなしとなった扉から中を覗くが、夕方のこの時間にはさすがに残っている生徒はいない……………はずなのだが。

佇む人影。揺らぐ姿。

「!？」

グシグシと目を擦ってから、もう一度教室の中を覗きこむ。

「……………今のは……………」

しかし、もうそこには誰もいなかった。

東三局『Default Player』（後書き）

若干ではあるが、愛称 ちゃんがついに登場。

ん？ 名前が見えない？

愛の力があれば見える。

< > < >

東四局『君を探して』（前書き）

若干感想板が質問板になりつつある。

だが答える。

Q、主人公の実力は？

A、咲 - 嶺上開花 + オリ主補正

東四局『君を探して』

「……お前、どうしたよ」

「んあ？」

翌日。教室でボーっとしていると、前の席に座っている男子生徒が振り返ってそんなことを尋ねてきた。えっと……。

「佐賀だっけ？」

「加賀だよ！ 加賀太郎だ！」

そうそう、そんな名前だったっけ。

「っと、話が逸れた。なんか今日お前一日中ボーっとしてるな。何かあったのか？」

「んー、まあ、あったっちゃーあったのかなー」

『Default Player』の言葉。夕方の教室の人影。

何故かこの二つの事柄が頭から離れていかない。

おかげで今日の授業中は散々だったな……授業中に上の空だったおかげで物理担当の丸山女史（29歳独身）にどやされるし。

「もしかしてあれか！？ 恋の悩みだったりするの！？」

「ちょっとその場で三十分ぐらい息止めてるよ」

「死ぬわ！」

佐賀の言葉は適当に流しておこう。

さて、部活だ。

咲・S a k i - 《風神録》

東四局 『君を探して』

「まさか日直だったとは……」

意気込んだにも関わらず早速出鼻を挫かれてしまった。

黒板周りの掃除エトセトラを共に日直の女子生徒（クラス委員長）を終わらせ、少し遅れてから俺は部活へと向かった。一応ゆみ姉にメールは送ってあるから問題は無いだろう。

「こんにちはー」

挨拶をしながら部室に入る。ゆみ姉たちは既に集まっており、全員ノートパソコンを出してネット麻雀に興じていた。まあ俺がいないとメンツが揃わないから卓で麻雀は出来ないし、しょうがない。

今からゆみ姉たちの対局を邪魔するのも悪いから、俺はまた課題

を片付けることに専念することにしよ。

「あ……」

カバンの中から勉強道具を取り出し、さてやるつと意気込んだところでゆみ姉が小さく声を上げた。

「どうしたの？」

「……来た」

「……！」

ゆみ姉の言葉に主語はなかった。けれど、何がということはずぐに分かった。

取り出そうとした荷物を机の上に放り出したまま、ゆみ姉の後ろに回りこんだ。

ノートパソコンのディスプレイに表示されているのは、『Default Player』の文字。

そのまま他の生徒を交えて、ゆみ姉と『Default Player』は対局を始める。

その打ち筋はまるで昨日と変わらない、堅実で実直なもの。真っ直ぐで、手堅くて、それでいて何故か儂げな雰囲気を感じる打ち方。

(……………)

今ココでハッキリと言ってしまつと、俺はゆみ姉や部長たちほど麻雀に入れ込んでゐるわけではなかった。熱意という点で言つてしまえばそこら辺にいるただの麻雀打ちよりも低いかもしれない。

けれど、今は違つ。

『Default Player』の打ち筋を見てみると、自分も打ちたいと思つ。自分もこの卓に、この対局に混ざりたいと思つ。と思つ。

ああ、俺は、この『Default Player』の打ち筋にこんなにも惚れ込んでしまつていたのか……。

気が付けば、対局は終わつていた。今回の結果はゆみ姉が一位、『Default Player』が二位で終了した。

やっぱり、強い。

「加治木先輩、どうしますか？ また勧誘しますか？」

津山先輩が尋ねてくる。

「いや、あまり何度もしつこく勧誘するのもアレだろう」

「だなー。今回は特になしだなー」

ゆみ姉と部長がそう判断する。

確かに、一度断つた相手に何度も勧誘するのは、相手も不快に思つだろう。

けれど、一言だけ、言いたかった。

「ゆみ姉、ちょっとゴメン」

「御人？」

ゆみ姉の横から体を乗り出し、キーボードを叩く。

『かじゆ：昨日、私たちには君は見つけられないって言ってたよね？』

『Default Player：言いましたけど、何か？』

これは、わざわざ言う必要のないこと。

けれど、どうしても言いたかった。

『かじゆ：見つけてみせる』

『かじゆ：私が必ず、君を見つけてみせる』

「.....」

「御人.....」

『システム：Default Playerが退室しました』

反応は、無かった。

「……絶対見つけてみせる」

十

と、言ったものの……。

「どうすっかなあ……」

ネット麻雀の相手の所在を調べるなんて、ハッキリって素人に出来るようなことではない。というか、一歩間違えば犯罪だ。そもそもそんなスキルを俺は持ち合わせていない。大前提として、俺はパソコン自体を持っていない。

「はあ……」

「お悩みだな！ 女か!？」

「ちよっとそこで一人ジャーマンしてくれよ」

「イヤだよ!」

昼食後、自分の席で紙パックのジュースを飲んでしていると佐賀が話しかけてきた。

「まあ、悩んでることには間違ってるねーよ。女の子ではないけどな」

このまま無視してもいいのだが、借りれるものは猫の手だろうが猿の手だって借りたい状況だ。ちよつと話してみよう。

「どれどれ、この『お悩み解決人』こと加賀太郎に話してみなさい」

「……お前……」

「ささ、一体何でお悩みだい？」

「……佐賀じゃなかったのか？」

「まだ間違えて覚えてたのか!？」

十

ということとで簡潔に事情を話してみた。

「なるほどな。つまりネット麻雀で惚れた相手がいるから、実際に会ってみたいが拒否されたと」

「若干言い方がアレだが、まあ概ね間違ってない」

これではまるで俺がストーカーのような言い草だが、間違いはほとんどないので細かくは訂正しない。

「一応俺もパソコン詳しいけど、流石にそんなこと出来ないし、仮にやったとしても犯罪だからな」

やっぱりそうか。やっぱり自分で直接交渉してみるしかないのか？でも「必ず見つける」って大見得切っちゃったしなあ……。

「その相手が校内LANに繋がってたらまだ打つ手があったんだけどな」

「そうか。……ん？」

「そんな目に見えない相手に恋してないで、今度の休日に俺と街に繰り出してナンパしないかナンパ！一緒に可愛い子をゲットしようぜ！」

「ちよつと待て」

今こいつ、ものすごく重要なことを言わなかったか？

「なんだ？」

「今お前何て言った？」

「だから今度の休みに俺と」

「そつちじゃない！その前！」

「えっと……」校内LANに繋がってたらまだ打つ手があったんだけどなあ』か？」

「その話、詳しく聞かせてくれ！」

東四局『君を探して』（後書き）

主人公がやけに　　ちゃんに食いつくって？

未来の嫁だからに決まってるでしょうが。

南一局『お前が欲しい』(前書き)

(主人公の)黒歴史回。

南一局『お前が欲しい』

「ローカルIP?」

「ああ、クラスのパソコンに詳しい奴に教えてもらったんだ」

翌日、部活の時間に佐賀から聞いた話をゆみ姉たちに話した。

学校内でパソコンを使ってる場合、みんな校内LANに接続することになる。今までは、それを利用して生徒から新入部員を募っていた。その校内LANというものは、学校の至る所に設置してある。

つまり『Default Player』が何処の校内LANに接続しているのかが分かれば、『Default Player』の居所を特定することが出来るのだ。

その特定する方法が、それぞれの校内LANを識別するために存在するローカルIPである。

現在、パソコンのチャットルームに表示されるゆみ姉たちのハンドルネームの横には、九桁の識別IDが表示されている。

「なるほど。ローカルIPから何処の教室から接続しているのかを特定するのだな」

ゆみ姉の言葉には、若干呆れたような感心したような、そんな感情が混じっていた。

「強制表示モードって……」

「ワハハ、風祭は相当本気みたいだな」

津山先輩の呆れた声に、部長の感心したような笑い声。

確かに、ちょっとやりすぎたような気がしないでもない。

けれど、これでようやく見つけられる。

咲 - S a k i - 《風神録》

南一局 『お前が欲しい』

カチカチ……。

トン、トン、トン……。

「……御人、さっきから手が動いてないぞ」

「へ？」

ゆみ姉の言葉でようやく我に帰る。

「気になるのも分かるが、今は自分のすべきことに集中したらどうだ？」

ゆみ姉たちがネット麻雀をし、俺が宿題をするいつも通りの時間。

気がつけば、俺はただシャープンでノートを叩いているだけだった。

「ハハハ……。そ、それでどう？ 来た？」

「来たら教えているさ」

「だよー……」

昨日ー昨日と連続で来た『Default Player』だったが、どうやら今日は来ないようだった。

「まあ、毎日来るってわけでもないだろうからなー」

「気長に待ちましょう」

「……ですね。コーヒー入れます。いる人いますか？」

またもや全員が手を上げる。いつも通り、俺は四人分のコーヒーを淹れるのだった。

……が、ゆみ姉と部長のマグカップを間違えてしまい、二人の「甘っ!」「苦っ!」という声が同時にしたのだった。

十

おとらに翌日である。

「来た！」

「!!!」

その言葉に俺はシャープペンを問題集の上に投げ出した。ゆみ姉の後ろからノートパソコンのディスプレイを覗き込む。

「ゆみ姉」

「ああ」

『かじゅ (x x , x) : やあ、久しぶり』

『Default Player) , (: たった二日ぶり
つすよ』

表示されたのは、ゆみ姉のローカルIPと下三桁が違うローカルIP。

「部長！ この番号は!?!」

「落ち着けて。えっと、この番号は……」

部長が予め調べておいた手元のメモと照らし合わせる。

「一年A組だな」

「一年、A組……!」

気が付いたら、体が動いていた。

「ちよつと行つて来ます！」

「御人！」

ゆみ姉の言葉を背中に受けながら、俺は足早に部室を後にした。

『Default Player（ ）：それで、私は見
つけられたっすか？』

「……………」

『かじゆ（ x x , x ）：ああ、大丈夫だ』

『Default Player（ ）：え？』

『かじゆ（ x x , x ）：たった今、君を迎えにいったよ』

十

走つて教師に見つかると面倒くさいので、足早に廊下を進む。

（あの時の人影…………）

思い出すのは、一昨日の夕方の教室。一年A組で見た人影。

果たして、これは偶然なのだろうか？

ガラッ

「失礼します」

一言そう言ってから、俺はA組の教室に入った。突然の来訪者に、教室に残っていた生徒たちの視線が一齐にこちらを向く。

そんな視線を気にせず俺は教室の中央まで進む。

(何処だ……！)

この教室に『Default Player』がいることは間違いないのだ。

グルリと教室を見渡すが、それらしき影は全く見つからない。

この教室にいるはずなのだ。ここに、いるはずなのだ。

でも、見つからない。姿が見えない。

「っ……！俺は、一年B組、風祭御人！麻雀部！」

「っっっ、いるはずなのに……！」

「……俺は、お前が欲しい!」

気が付けば、俺は叫んでいた。

周りの生徒がより一層騒ぎ出すが、今の俺にはそんなことはどうでもいいことだ。

それは、俺の心からの願い。

だから、俺は叫んだ。

君が、欲しいと。

そのときだった。

「ん……?」

それは、ほんの微かに感じた直感。違和感。一瞬だけ見えた、揺らぎのような感覚。

けれど、それはすぐに確信へと変わった。

「……見つけた」

真っ直ぐと見据え、側まで歩く。

一歩、二歩、三歩。

目の前に立ち、俺は右手を差し伸ばした。

「約束通り、見つけたぜ」

そこには、一人の女子生徒がいた。

この教室にいるということは、間違いなく俺と同学年、一年生。やや長い前髪の間髪から見える両目で、しっかりと俺を見ていた。

「……き、君は……私が、み、見えるっすか……!？」

彼女の声は、俺に見つけられたことがとても信じられなかったのか、若干震えている。

「ああ……ちゃんと見えてるよ。だから、こうして迎えに来た」

だから、もう一度言おう。

「俺は、君が欲しい」

「……!?!」

彼女はゆっくりと両手で俺の右手を包み込んだ。その手も、やっぱり震えていた。

「……わ、わたしを……見つけてくれた……初めて……見つけてくれた人が、いた……」

彼女は泣いていた。肩を震わせ、涙を流していた。

今までの苦しみを、悲しみを吐き出すように、泣いていた。

「……………」

俺は黙って、彼女の頭に左手を置いた。

こうして俺は、彼女を見つけ出したのだ。

十

「……心配になって来てみれば……」

「と、とんでもないことになってますね……」

「ワハハ、青春だねー。ムツキ、顔が真っ赤だぞ」

「え、ええ！？　そ、そんなことないですって！」

「アイツはたまに周りが全く見えなくなることがあるからな」

「これはしばらくの間弄れそうだな」

南一局『お前が欲しい』（後書き）

という訳でついにメインヒロインの登場。これでようやくイチャラブ展開に進める。

とりあえず、自分で書いといてなんだけど。

この主人公痛すぎてねーわwww

南一局一本場『私の世界を変えた人』（前書き）

いわゆる番外編。

ストックが尽き始めた。

毎日更新が辛くなってまいりました。

南一局一本場『私の世界を変えた人』

咲 - S a k i - 《風神録》

南一局一本場 『私の世界を変えた人』

私は、子供の頃から存在感が無いとよく言われていた。

歌って踊ったりしないう限りは誰にも気付かれない影の薄い子だったっす。

多くの人は、自分以外の誰かとコミュニケーションするために、情報を集めたり色々行動して、時間やお金を消費することがあるっすよね。

その面倒さとコミュニケーションで得られるものを天秤はかりにかけて、切り捨てたりもするでしょう。

そんな訳で、私も完全にコミュニケーションを放棄してきたわけで、子供の頃からこんな感じだと特に辛くもないし、存在感の無さに拍車がかかるばかりだったっす。

高校に入学したところで、それが変わるなんて一切思ってたっす。

けれど……その予想は全く違うものになった。

俺は、お前が欲しい！！

それは、一人の男子生徒だった。私と同じ、一年生で、麻雀部の部員。

教室に入ってきたかと思ったら、教室の真ん中でそんなことを叫び始めたんすよ？

誰からも見つからない、そこにいないはずの私を、大勢の人の前で叫んで求めてくれた人がいたんすよ？

おかしな人っす。

そしてそれと同時に、面白い人だとも思った。

けれど、私の驚愕はそれで終わらなかつた。

見つけた。

彼と、目が合った。

彼は真っ直ぐと私を見ていた。

それは、私の今までの人生の中でありえないことだったつす。

存在感の無い私を、今まで誰にも見つからなかった私を、彼は意図もアツサリと見つけてしまったのだ。

約束通り、見つけたぜ。

そう言って、彼は私に向かって手を差し伸ばしてきた。

信じられなかった。

き、君は……私が、み、見えるっすか……!?

声が震えていた。

ああ……ちゃんと見えてるよ。だから、こうして迎えに来た

そしてもう一度、彼はしっかりと言うてくれたっす。

俺は、君が欲しい。

それはもう、嬉しいなどという言葉では表しきれない感情だった。

それは、今まで諦めていたこと。二度と手に入ることがないと、諦めてしまっていたこと。

差し出された彼の手を取り、気が付けば、私は涙を流していたっす。

ようやく現れた、私を見つけてくれた人。その目で、私の姿をしっかりと見つめてくれる人。その手で、私の手をしっかりと握ってくれる人。

高校一年の春。私は、ようやく出会うことができた。

南一局一本場『私の世界を変えた人』（後書き）

ほぼ原作通り。

原作でのゆみへのデレ具合を御人に変換させるため、モモはかなりのデレデレになる予定。

ただ本格的なイチャイチャは県予選後からだと思われる。

南二局『五人目の部員』（前書き）

以前主人公の実力のほどを述べましたが、書いてるのは作者である自分なので、素人な打ち方をする可能性があるので注意。

対局シーンはもうちょい先だけど。

麻雀漫画のファンフィクション？

自分が書いてるのは学園ラブコメです。

南二局『五人目の部員』

「……………」

俺は今ほど、かの有名な赤い人の『若さ故の過ち』という言葉を実感したことは無い。

「『俺は、君が欲しい』!」

「だあああ!! もうリピートするのは止めて下さい!!」

「ワハハー、なかなか情熱的なプロポーズだったなー」

「マジで勘弁してくださいって部長!!」

昨日からずっとこの調子である。

昨日、探していた『Default Player』をようやく見つけることが出来た。それはいいんだ。見つけることができたことに関しては何の問題は無い。

問題は、教室のど真ん中で俺がやってしまった行動だ。

い、いくら周りが見えていなかったからって、まだまだ人が残っている教室であんなことを叫んでしまうとは……!!

「あ、あの、わ、私は嬉しかったっすよ?」

止めてくれ! 俺の心の点棒はもう無いんだ! とっくにハコな

んだってば!!

咲 - S a k i - 《風神録》

南二局 『五人目の部員』

「それじゃあ、改めて自己紹介しとこうかー？」

「そ、そうっすね」

部長の言葉に、彼女はコクリと頷いた。

「一年A組の東横桃子とうようももこっす」

「部長で三年の蒲原智美だ。よろしくなー」

「二年の津山睦月だ」

「三年、加治木ゆみ。ほら、いつまでも項垂れているな」

「はい……。えと、昨日も言ったけど、一年B組の風祭御人。これからよろしくな」

「はい、よろしくお願ひしますっす!」

いい笑顔だ。というか……。

(結構……というか、すごく、可愛い……！)

昨日は『Default Player』が見つけれられたということに感激していて全然気が付かなかったが、かなりの美少女。ハッキリと言ってしまえば、完璧に好みである。

しかし、こんな容姿しているというのに、彼女は影が薄いらしいのだ。

これはつい先ほどの出来事である。

『し、失礼しますっす』

『あ、こ、こんにちわー』

『ん？ 御人、誰に向かって挨拶してるんだ？』

『……え？』

とまあ、こんな感じである。彼女曰く、

「まあ、皆さんが気付かないのも無理ないっす。私は昔から存在感がなかったっすから」

とこのことらしいのだが。

「それじゃあ、私たちが気付かなかったのはともかく、何故御人には気付けたんだ？」

確かに、ゆみ姉の言うとおりだ。あの時、東横の存在はあのクラ

入にいた彼女のクラスメイトにすら認識されていないような状況だったらしいのだ。それになのにも関わらず、何故か俺は東横の存在を認識し、気付くことができた。

「そ、それは、私にも分からないっす」

「俺にも分かんない」

不思議なことがあったもんだ。

「ま、そこら辺の細かいことは気にしなくても大丈夫だろー」

いやまあ、そうなんすけどね、部長。

「麻雀部員がやることと言ったら、一つしかないだろー？」

そう言っつて部長が指差すのは、もちろん雀卓。

「君の実力、直に見せてもらっていいかな？」

「もちろんっす」

その申し出を東横は快諾。

(……………よっしやー！)

これでよっやく東横と、あの『Default Player』と対局することが出来る。

「メンツは…………私と蒲原、あと」

(ワクワク)

「津山か」

「異議有り!!」

ちよつとゆみ姉!?

「そこは俺をメンツに入れてよ! 俺超頑張ったでしょ!？」

そのために今まで頑張ってきたと言っても過言ではないのだから。

「あ、あの、加治木先輩、私は別に後でもいいので……」

「ありがとうございます津山先輩!」

今まで地味な先輩だと思っててごめんなさい!

「……何やら不快な思考を感じ取ったのだが……」

「しょうがない、津山もこう言っているわけだし」

「ジャンケンだな」

どうにもゆみ姉ユミと部長は俺を苛めたいらしかった。ちくせう。

公正なるジャンケンの結果。

「……（血涙）」

「あ、あの、いいんすか？」

「ああ、気にしなくて大丈夫だ」

「ワハハ、我が部にもこういう弄られキャラボジションが欲しかったところなのだよ」

麻雀の神様はどうにも俺を嫌っていたようだ。結果は俺だけグーで全員パーの一発負け。どうにも作弄的なものを感じざるを得ない。

しかしいつまでも血涙を流しているわけにもいかない。

卓を囲めないならば、後ろから観戦するしか。

ガラッ

すると突然、部室の扉が開けられた。

「失礼しまーす。あ、やっぱりここにいた！」

「うげ」

扉から顔を覗かせる来訪者。それは我がクラスの学級長だった。

「風祭君！ 君今日掃除当番でしょ！？ さつさと来る！」

三つ編みにメガネという典型的な委員長スタイルの彼女は、如何にも「私怒っています」といった形相でツカツカと詰め寄ってきた。

どうやらコッソリと掃除をサボってきたことがバレたらしい。

「い、いやー、うっかりしちゃってて……で、でももう流石に終わってるでしょ？ 今から言ったところで」

「大丈夫です。ゴミ捨てという名誉の仕事を全員一致で君のために取っておいております」

「心優しいクラスメイトたちだよ畜生！」

掃除サボった俺が言う台詞ではないが、わざわざ仕事を残してまで押し付けるとは何て奴らだ。

「で、でも今俺部活中」

「ではなさそうですが？」

振り返ると、そこには既に卓を囲んで麻雀を打つゆみ姉たちの居場所は、現在この部室の中には何処にもない。

「ほら、さつさと行きますよー！」

「ぬあー……！」

ドナドナよろしく首根っこを掴まれズルズルと連行されていく。

まあ、なんとというか、今日は厄日だったらしい。

十

「……………」

「……どうした東横、連れて行かれた御人が気になるのか？」

「へー？ い、いや、そんなことないっすよ」

トン

「あ、それロンです」

「えー!？」

「リーチ相手に生牌シヨンパイのドラ切りか」

「それで気になってないって言われても信憑性に欠けるな」

「う、う、う……」

(せ、先輩たちは何の話をしてるんだろっ……?)

南二局『五人目の部員』（後書き）

友達の家で徹マンしてたため一日置いての更新。

「通らばリーチ！」（かなり怪しいところを出してリーチ）

「通らないな」（直撃）

「キャプテン　　！！！！」　　ここまでがテンプレ

ちなみに俺が参加した半荘三回全てトップでした。

南三局『青春の帰り道』（前書き）

サブタイトルは『リア充爆発しろ』

もしくは『（作者の）黒歴史』

南三局『青春の帰り道』

「……はあ」

「ん？ どうしたどうした！ 元氣無いな！ いいか？ 溜息を吐くと幸せが逃げるっていうのは本当の話なんだぞ。人の体の中には陽の気と陰の気ってのがあってだな」

前の席に座る佐賀が何やら長々と語り出したが聞き流す。

まあ簡単に俺が朝一から溜息を吐いている理由を述べるならば、昨日結局東横と対局が出来なかったということだ。

どうやら昨日は本当に厄日だったらしく、教室に戻ってゴミ捨て（委員長の監視付き）を終えたと思ったら、廊下で丸山女史に捕まり教材運びを手伝わされ（授業中上の空だった罰とのこと）、気が付けば完全下校時刻になってしまった。部活に全く出そうとしない教師ってのはどうなんだ……？

さらにさらに、今日はゆみ姉と部長の三年生コンビが特別講習を受けるとか何とかで部活自体がお休みになってしまった。

本当にどうしてこんなに不運なのだろうか……。

しょうがない、家に帰ってラノベでも読んでいよう……。

もう一度溜息を吐いてからカバンを手に帰ろうとする。

「あ、あの、風祭……君」

「ん」

背後から声をかけられて振り返る。

するとそこにいたのは、我が麻雀部の五人目の部員、東横桃子だった。

咲・S a k i i - 《風神録》

南三局 『青春の帰り道』

他のクラスの生徒が教室に入ってきたというのに周りのクラスメイトたちは全くの無反応。これも東横の言う『存在感の無さ』とか言うやつなのだろう。

「どうかした？」

「あ、いや、その……きよ、今日は部活がないっすよね？」

「ああ、ゆみ姉たちがいないからなー」

「それで、その……い、一緒に帰らないっすか？」

へ？

「よ、予定があるなら別にいいんすけど……」

「いや、放課後の予定なんて一切ないから全然大丈夫だ」

純粹に驚いた。ハッキリ言っただけの子との関わりはそんなに多くはなかった。ましてや女の子から「一緒に帰ろう」などと言われたことなどあるはずがない。可愛い女の子が若干顔を赤らめながらモジモジとそんなことを言ってくるのを、断る男がいるのだろうか？
いや、いるはずないね！

「そんじゃ、帰るか」

「う、うん」

目を瞑りながら陶醉するように未だに無駄な知識をひけらかしている佐賀を無視し、俺は東横と共に教室を後にした。

十

「.....」

二人並んで帰り道を歩く。気まずいとまでは言わないが、若干空気が重かったりする。お互いにそんなに話すような性格ではないし、何だかんだ言っただけで出会ってからもまだ三日目なのだ。

.....なのに、こんなにも意識してしまっている。

チラリと横目に東横を見やる。

何度目になるか分からないが、ハッキリ言って東横は俺の好みだつたりする。どうしてこんなに可愛い子が周りに無視されるレベルで存在が薄かつたりするのだろうか。

「……………なあ、東横」

「うひゃあー!」

(……………可愛い!)

じゃねーよ。

「どごした?」

「いや、その、声をかけられるということがあまりなかったっすから……………」

いやいや、今俺思いつきり隣を歩いてるんだけど。

「私は、隣にいようが目の前にいようが、歌ったり踊ったりしない限り誰にも気付かれないっすよ」

東横は自嘲するように、ポツリポツリと語り出した。

「私は、今まで周りの人間とのコミュニケーションを放棄してきた。他人とのコミュニケーションで得るもののためにする努力を、私は面倒だと言って切り捨ててきたっす」

少し、東横の歩くスピードが遅くなる。俺も歩く速度を落とす。

「おかげで私の存在感の無さは拍車がかかるばかり。きっとこれから先もずっと、私は他人とコミュニケーションを取ることはないとずっとそう思ってたっす」

ついに東横の足が止まる。

「……そんなとき、一人の男の子が教室に乗り込んできた」

俺は、お前が欲しい！

「見つからないはずの私を、大勢の人の前で叫んで求めてくれた。それだけじゃない。今まで決して見つかること無かった私に向かって、手を差し伸ばしてくれた」

見つけた。

「……本当に、嬉しかったっす。あの差し伸べられた手で、私の世界は変わったっす。だから、改めて言わせてください」

見つけてくれて、ありがとう。

「……………!」

……………か、顔が熱い！ これはダメだ、本当にダメだ！

「ど、どうしたんすか？」

「い、いや、何でもない何でもない、気にしないでくれ」

東横の笑顔に完璧にやられた。顔が熱くてまともに東横の顔が見れない。

(……………)

ああ、そうか。

こうして笑顔を見せてくれるだけで、こんなにも幸せになれる。

知ることになったきっかけは、ただのネット麻雀。実際に出会ったのはわずか二日前。

それにも関わらず、俺はこんなにも東横を意識してしまっている。

俺は、東横桃子のことをどうしようもなく好きになってしまった

のだ。

「そ、それでなんすけど……ひ、一つお願いしたいことがあるんすけど……」

胸の前で人差し指をツンツンとしながら東横はふいつと視線を逸らす。

「お、お願い？」

そんな仕草に「ああ可愛い」などと脳内でニヤニヤする。顔に出ないようにするので精一杯である。というか、我ながら短時間にベタ惚れしすぎではないだろうか。

「……な、名前で呼んでも……いいっすかね？」

「……全然大丈夫！」

一瞬考えてしまったが、これは即断でOKしていい内容だった。

「そ、そうっすか？ ……じゃ、じゃあついでにわ、私のことも名前前で呼んでくれると……その、嬉しかったりするんすけど……」

「……と、東横が呼んでいいって言うなら……」

なんかもう、ハッキリ言って舞い上がってます。キャラが違っ？ 色々あってテンションが振り切れてるんだよ！

「……呼んで欲しいです」

「……じゃ、じゃあ、これからよろしくな……モ、モモ」

……名前で呼ぶのが恥ずかしかった。へタレ言っな！

「よ、よろしくお願いしますっす……御人君」

その後、東横……モモと分かれて自宅に戻った途端、頭を抱えながら「うわ何この陳腐な恋愛の三文小説みたいなのリ!? 恥ずかしいすぎる!」と首を吊らんとせんばかりの勢いで身悶えることになるのだった。

南三局『青春の帰り道』（後書き）

よし、これでモモのデレフラグは立ったはずだ。

…リアル身悶えながら書いたこの話が、後のイチャラブ展開への礎とならんことを。

南四局『とある二人の麻雀技巧・前編』（前書き）

初の対局シーン。

たったこれだけでも関わらず書くのに結構時間がかかった。

得点計算は現在勉強中。

牌の表記について

筒子	1 2 3 4 5 6 7 8 9
萬子	一 二 三 四 五 六 七 八 九
索子	壹 貳 参 肆 伍 陸 漆 捌 玖

南四局』とある二人の麻雀技巧・前編』

……長かった……！

「ようやくモモと麻雀が出来る……！！」

「と言っても、まだ私が麻雀部に入部してから三日しか経ってないっすけどね」

そこら辺は突っ込んではいけない。

咲・S a k i・《風神録》

南四局』とある二人の麻雀技巧・前編』
マジヤンスキル

というわけで、念願叶ってモモと対局することが出来るようになったのだ。メンツは俺とモモ、ゆみ姉と部長だ。

「……西か」
シヤ

「東っす」
トシ

「南だな」
ナン

「北だ」
ベイ

席決めの結果、俺も向かい側がモモ、カミチャ上家がゆみ姉、シモチャ下家が部長
となった。

二つのサイコロを振り、仮仮親、仮親と決めていく。

「んじゃ親はーっと……ただいま左八か」

キチャ起家はゆみ姉か。

さて、対局開始だ。

十

《東一局 親：加治木ゆみ ドラ：一筒》

二向聴ニヤンシヤンニヤンのなかなかの良手から五巡目。

34589三四五参参肆肆伍 8

(よし、張った)

理想的なタンピン三色だ。ここで勢いを付けておこう。

「リーチ立直！」

九筒を切ると共にリー棒を出す。これで安くあが和了っても8000マンガン、

五索が来れば一盃口も乗って12000だ。^{イーペーコー}
^{ハネマン}

「ワハハ、残念だったな、風祭」

へ？

「^{ツモ}自摸。^{メンゼン}面前・^{ハク}白・ドラ1、1000・2000だ」

「うぼあ」

俺がリー棒出した途端にこれだよ！

なんとも幸先の悪い出だしだった。

東	加治木ゆみ	2	3	0	0	0	(-	2	0	0)
南	風祭御人	2	3	0	0	0	(-	1	0	0)
西	蒲原智美	3	0	0	0	0	(+	5	0	0)
北	東横桃子	2	4	0	0	0	(-	1	0	0)

十

《東四局 親：東横桃子 ドラ：五萬》

南	加治木ゆみ	2	8	6	0	0
西	風祭御人	1	7	6	0	0
北	蒲原智美	3	3	9	0	0

東 東横桃子 24900

1345一二八陸漆玖玖白白 二

八巡目のこの時点で三向聴^{サンジャンテン}。親番だし、白を鳴いてさつさと和了りたいところではあるが、どうにも誰かに抱えられている気がする。

引いてきた二萬^{ニマンワン}を手牌に加える。そして八萬^{ハマンワン}を切り出そうとして、それが先ほど立直^{リーチ}をかけたモモの裏スジだということに気付いた。

ベタオリするわけではないが、親リーの一発だけは避けたい。代わりに一筒^{イチピン}を切る。

異変に気付いたのは、その時だった。

トンッ

(……へ?)

下家^{シモチャ}の部長が切ったのは、ドラの五萬^{ウイワン}。モモの裏スジ。

「ロンっす」

「は?」

「リーチ一発ドラ1、裏が乗って11600っす^{ヒンビンロク}」

ニツコリと笑うモモに対し、驚愕の表情を浮かべているゆみ姉と部長。いや、俺としては部長が親リー相手にこんなにも無警戒に振り込んだことが驚きなのだ。

「え、ちよ……」

「あー……東横、すまないが……キチンとリーチ宣言の発声はしたんだよな？」

あまつさえそんなことを言う始末。

「何言ってるんだよゆみ姉、さつきちゃんとリーチ棒出して『リーチ』って言ってるじゃん。ねえ、津山先輩」

俺だってちゃんと聞こえていたというのに、両脇の二人がモモの声を聞き逃すはずがない。同意を求めて後ろから対局を見ていた津山先輩に同意を求める。

「……いや、私にも聞こえなかったのだが……」

「え!？」

しかし帰ってきた言葉は、さらに俺を驚愕させるものだった。

「いや、俺にはちゃんと聞こえてましたよ？ いくらなんだって、目の前に座っている人の声が聞こえないはずが……」

と、その時、俺は昨日のモモとの会話を思い出した。

私は、隣にしようが目の前にしようが、歌ったり踊ったりしない限り誰にも気付かれないうすよ。

「……モモ、お前つてもしかして……」

「御人君は気づいたみたいっすね」

クスクスと笑うモモは、純粹に可笑しくて笑っていたのか、それとも自虐的な意味が含まれていたのか。

「私の気配はいわばマイナスの気配。そのマイナスは私の牌も巻き込むっすよ。……誰もアタシの捨て牌からは和了れないし、私は誰にも振り込まない」

「……」

思わず絶句してしまう俺たち四人。

「……」

そんな俺たちの沈黙とは別の沈黙と共に、モモは少し視線を下げてしまった。

「……あの」

「そっかー、つーことは、モモから直撃を取るの難しそうだなー」

モモの言葉を遮るように、俺はわざとらしく声を大きくする。モモが何を言おうとしたのかは分からないが、それ以上言わせたくないかった。

「でも、どうやら俺には通用しないみたいだけどな」

ふふんと笑いながら、俺は人差し指を振った。

「……そうだな、我々もこれからは気をつけなければならないな」

「ワハハー、まるで黒ひげ危機一髪をやってる気分だなー。もしくは十七日」それは漫画が違います」

ゆみ姉たちもそう言って笑い出し、そんな俺たちにモモは呆気に取られた表情になる。

「さて、東四局一本場だ。……そのまま逃げ切れると思うなよ、モモ」

「……いや、逃げ切ってみせるっすよ」

やっぱり、モモは笑ってた方が可愛いな。

それはさておき。よし、こっから巻き返す！

南	加治木ゆみ	2	8	6	0	0
西	風祭御人	1	7	6	0	0
北	蒲原智美	2	2	3	0	0
東	東横桃子	3	6	5	0	0

(- 1 1 6 0 0)
(+ 1 1 6 0 0)

南四局『とある二人の麻雀技巧・前編』（後書き）

更新が遅い？

それはレポートと再燃し始めた遊戯王のせい。

スタダ400円ウマーです（＾p＾）

西一局』とある二人の麻雀技巧・後編』（前書き）

前回の続き。

時間をかけて書いた割には、このクオリティ。

いくらレポート三つと同時進行だからとはいえ、梶野選編が不安になる。

西一局『とある二人の麻雀技巧・後編』

というか、得点を見て気が付いた。

南	加治木ゆみ	28600
西	風祭御人	17600
北	蒲原智美	22300
東	東横桃子	36500

俺、最下位だった。トップとの差は18900点。まだ東四局だから焦る必要もないが、引き離されすぎても後々まくれなくなる。

そろそろ、調子上げてかないとなあ……。

咲 - S a k i - 《風神録》

西一局 『とある二人の麻雀技巧・後編』
マイジャンスキル

《東四局一本場 親：東横桃子 ドラ：八筒》
パービン

Side：津山睦月

現在、麻雀部の部室では先輩の二人と後輩の二人が対局中だ。順位は、新入部員である東横さんが一位、以下、加治木先輩、部長、これまた新入部員である風祭君と続く。

私は対局から外れているため、四人の後ろを転々と歩きながら手牌を覗かせてもらっている。

・御人の手牌

89七八八八九壹貳參北北 7

十四巡目でこの手配。うむ、ここは八萬切りだな。ペンチャン待ちになるが、これば一盃口にチャンタだ。ドラもあるし、リーチすれば自摸っても満貫だ。

「リーチ」

（ は？ ）

今、風祭君がリーチをしたのはいい。けれど、彼は何を切った？ 私の目間違いでなければ、彼が切ったのは……。

（ち、七萬……！？）

私には理解できない。どうしてこの場面で九萬と北のシャボ待ちに？ おまけに北は既に枯れており、九萬も残り一枚だ。

しかも下家の部長から七萬が切られた。もし八萬を切っていれば一発だった。

「ロン、2900は3200だ」

しかし、運が良かったのか、最後の九萬は対面の東横さんから放銃された。ただ一発でもないので、点数は微々たるもの。

果たして彼は何を考えているんだ……？

南	加治木ゆみ	28600
西	風祭御人	20800 (+3200)
北	蒲原智美	22300
東	東横桃子	33300 (-3200)

Side: 津山睦月 out

十

Side: 加治木ゆみ

《南一局 親: 加治木ゆみ ドラ: 三筒》
サンピン

南場に入り親番が回ってきたが、何やら嫌な予感が漂ってくるな。その出所は、シモチャ下家の御人。

先ほどの御人の和了りアガは不自然だった。

あいつはリーチをかけた際、パーワン八萬ではなくチーワン七萬を切った。いくらペンチャン待ちとはいえ、あの状況ではシャボ待ちより出やすい牌には違いなかった。それなのにも関わらず、あいつはほとんど悩むそぶりも見せずにチーワン七萬を切ったのだ。

思えば、こいつは昔からこういったことが度々あった。所謂、分

の悪い賭けというものだ。

例えるなら「九割の確立で当たるクジ」と「一割の確立で当たるクジ」を選べと言われたとする。普通の人間なら、当たりを望むのならば前者のクジを選ぶだろう。普段の御人ももちろんそちらを選ぶ。しかし、御人は唐突に何のためらいもなく後者を選ぶときがあるのだ。

もちろん、疑問に思い、何度も尋ねたことがあった。

『どうして確立の低い方を選ぶんだ？』

その質問に、御人はいつも笑いながら同じ文句で返すのだが……
なんだったかな。

っと、いかんいかん、今は対局たいきゆうに集中せねば。

・ゆみの手配

178二四五六式アカ参捌西發發 三

ふむ、悪くはない。發を鳴いてもいいが、赤ドラもあることだ。
ここはじっくりと腰を据えていこう。

そして数巡後。

・ゆみの手配

789二三四五六式アカ参捌發發 七

よし、張ったぞ。役は無いが、裏ドラに期待、といったところか。

「リーチ」

リーチ宣言と共に千点棒を出す。

そのときだった。

「……んー、ゆみ姉もリーチか……じゃあ、俺もそろそろかな」

その声に、手配を確認していた目線を上げる。

聞こえてきた声の主、御人は、静かに笑っていた。

「んじゃ、リーチ」

(！？)

そしてそのまま自摸ツモした牌を切り出したと同時にそう宣言した。

(ツモ切りリーチ……！？)

ざわりと鳥肌が立った。

蒲原と東横はただツモ切りリーチを訝しげに思っていたようだが、それ以上は何も感じていないらしい。

しかし、何かがある。

本能的に一発を消さなければならぬような気がした。しかし、リーチをかけてしまった私はロン以外で鳴くことはできない。

幸い、ツモった牌は安牌だった。自分に一発が直撃することはなかった。

そして、御人が牌に手を伸ばす。

「……ツモ」

ああ、そうだ思い出した。

・御人の手配

1 1 1 2 2 三三七八九南南南 三

「リーチ一発、メンゼン、ダブル南^{ナン}、三暗対々^{サンマントイトイトイ}……裏ドラは乗らなかつたけど……4000・8000だ」

御人がいつも言う言葉。

「追い風、吹いてきたみたいだ」

そう言いながら、御人は笑った。

その笑みは、昔となんら変わっていないかった。

東	加治木ゆみ	2	0	6	0	0	(-	8	0	0)	
南	風祭御人	3	6	8	0	0	(+	1	6	0	0)
西	蒲原智美	1	8	3	0	0	(-	4	0	0)	
北	東横桃子	2	9	3	0	0	(-	4	0	0)	

Side: 加治木ゆみ out

十

対局終了。

いやー、久しぶりに真面目に麻雀した気がするよ。久しぶりに『風』も読めたし。やっぱりまだまだ衰えていないってことだな。

……ん？ 対局の結果？

いやいや、いいじゃんじゃん別に。俺が倍ハイマン萬和了って終わったってことだ。

……聞くの？ 聞いちゃうの？

……ハコリましたけど何か？

自分の親番で調子に乗った結果、ゆみ姉の国士直撃コクシして飛びましたよ！ 48000点ガッツリ持っていかれましたよ畜生！

「か、かける言葉が見つからない……」

「ワハハハ、格好付けた割にはあっけなかったな」

「ふ、結局、オマエ従弟はワタシ従姉には勝てないってことさ」

「げ、元気出してくださいっす」

モモの優しさが身に染みる……こ、今度こそ絶対カッターヤルー！！

俺の魂の叫びが夕焼け空に響き渡り、画面がワイプしていくようなそんな錯覚に陥った高校生のとある春の出来事だったとき。

終われ。

西一局『とある二人の麻雀技巧・後編』（後書き）

こんなオチ。

とりあえずこの小説における主人公補正の一部を書けたし、まあいいか。

キーワードは『風』

第二の主人公補正のヒント

宮永咲

リンシャンハイ
嶺上牌

天江衣

ハイテイハイ
海底牌

風祭御人

????

追記・何やら点数に間違いがあったようですが、めんどくさいのでそのまま。各自脳内補完をお願いします。

西二局『遊びに行こう〜お誘い編〜』（前書き）

レポートが大変で、大変な遅延更新。

ストレス発散にニヤニヤするゼヤッホウ！

西二局『遊びに行こう〜お誘い編〜』

はてさて、俺がこの鶴賀学園に入学してから早くも一ヶ月の月日が経とうとしていた。

進学校ならではの授業の進みの速さや、やや多目の課題にも若干慣れ始め、友人たちと花の高校生活を謳歌していた。とはいってもこの辺りはだいたい田舎の方なので、遊ぶとなると休日に電車に乗って街まで出て行かなければならないのだが。それでもカラオケやらゲームセンターやらいかにも「らしい」休日を過ごしていた。

また部活動においても、男子が俺だけなので若干肩身の狭い思いをしているが、まあそれは女の子に囲まれていておいしい思いをしていると考えて我慢しよう。ちなみに戦績は部活内で部長とモモと三人で二位争いの真っ最中。一位はもちろんゆみ姉。俺は部長の麻雀の腕に敵わず、部長はモモのステルスを破ることが出来ず、そしてモモのステルスは俺に効かないため、見事に三竦みで三つ巴の状況なのだ。

そんな感じで私生活でも部活動でもなかなか充実した毎日を送っている。

……が、今俺は若干悩んでいることがあるのだ。それも、あまり誰にも相談できそうに無い類の悩みが。

なんとというか、その……どうやってモモを遊びに誘えばいいのだろうか。

誰かに言うというわけではないのでここでは素直に認めるが、俺はモモが好きだ。友人としてとか部活仲間としてとかでなく、純粹に一人の女の子としてモモが好きなのだ。

気になる女の子を遊びに誘おうとする事は、十五歳男子としては全く不自然な行動ではないはずだ。

ただ、生まれてこの方、女の子を遊びに誘ったことがないのでイマイチ勝手が分からない。ちなみにゆみ姉とだったら二人で遊びに行ったことならあるが、結局従姉おねと遊びに行っただけなので、そちらの勝手もよく分からない。

なので色々と悩んでいたりするのだが、中学からの友人がいないこの高校に、残念ながらそちらのことにに関して気軽に相談できるような友人はまだいない。佐賀？ アイツに女の子の話なんてしたら色々とメンドクサイから却下。

俺の身近にいて、こういったことを気軽に相談できるような人物は……。

そう考えたところ、思い当たる人物は一人しかいなかった。

『なるほど、東横をデートに誘いたいと、そういうことだな?』

「う、うん。まあ、そんな感じかな」

夜。開け放たれた窓の縁に腰をかけ、足を外に投げ出しながら俺は電話をかけていた。電話の相手はゆみ姉。やっぱり、こういうときに頼りになるのは従姉である。

『別に相談に乗るのにはやぶさかじゃない。ただ前提条件として、お前は東横のことが好きだということでもいいんだな?』

その質問に、一瞬言葉に詰まる。だが、相談に乗ってもらっている以上素直に答えなければならぬ。

「う、うん」

『そうか』

うわ、これスゲー恥ずかしいんですけど。なんか携帯電話の向こうのゆみ姉が滅茶苦茶ニヤニヤしてるのが手に取るように分かる。

「そんなわけで、どのようにしてモモを遊びに誘ったもんかと思い、相談に乗ってもらいたいです」

『なるほどな。事情は分かった。そうだな……』

片膝を立てて窓の縁に足を乗せ、近くの机に置いてあったマグカップに手を伸ばす。中身のコーヒーを啜りながらゆみ姉の言葉を待つ。

『……普通に誘えばいいんじゃないか？』

「いやいや。それが出来ないから相談しているのでしてね？」

『これが私がお前の相談に乗ってやった結論だよ。……そんなに難しく考えることじゃないさ。どんな些細な理由だっていい。気軽に遊びに行こう、そう申し出ればいいさ』

「……まあ、ゆみ姉がそう言うなら……」

鶴賀に入学を決めたときもそうだったが、基本的に俺はゆみ姉のことは信じている。そのゆみ姉が大丈夫だというのならばきっと大丈夫なのだろう。若干シスコン気味なのは認めよう。

『それじゃあ、頑張れよ』

「うん、ありがとうゆみ姉」

「……全く、似た者同士にもほどがあるだろう。まさか二人揃って同じ相談をしてくるとはな……」

ゆみ姉に相談して一日が経った。ゆみ姉にはああ言ったものはてさてどうしたものだろうか……。

どんな些細な理由でもいいから、ねあ……。

「くん！……み、御人君！」

「うわ！？」

考え事に集中しすぎて、突然かけられた声に驚いて思わず飛び上がってしまった。

しまった、今はモモと二人で帰る途中だったんだ。深く考えすぎてて変に入り込みすぎちゃった。

「な、何モモ、どうかした　ど、どうした！？」

振り返ってモモの顔を見て、俺はギョツとなった。モモの両目に涙が溜まり、凄く不安そうな表情になっていたのだ。

わわ、な、何だどうした！？　む、無意識の内に何かしちまったのか！？

「そ、その、何度も声をかけたのに、全然反応してくれなかったっすから……み、御人君にまで気付かれなくなっちゃったのかなって……」

(……か、可愛い……！)

って、ちげーよ……！ 確かに可愛いけど今はそこじゃねーよ……！
涙目上目遣いのモモに思わずやられてしまった。

「わ、悪い、ちょっと考え事してただけなんだ！ 別にモモのことを無視してたとか、そういうことじゃ全く無いんだ！」

理由がなんであろうと、女の子に涙を流させてはいけない。ましてや今回は俺の責任以外の何ものでもない。

「だ、大丈夫つすよ。変な気を使わせちゃってごめんなさい」

「あ、ああ……」

……ん？ もしかしてこのタイミングじゃないか……？

些か場違いな気がしないでもないが、今しかない。

「そ、それじゃあさ、何かお詫びがしたいから、こ、今度の休みにどうか出かけないか？」

「……え？」

「い、嫌だっったり用事があったりするんなら別にいいんだけどさ。その、よかつたらどうかなって……」

ついつとモモから視線を外す。モモからの反応はない。

だ、ダメか……？

「……い、いいんすか？」

「へ？」

「そ、その……わ、私のために、御人君のお休みを潰させちゃって……」

「っ、潰れなんかしないさ、モモと遊びに行けるなら俺は……っ」と

ち、ちと余計なことを言い過ぎた。

「ど、どうかな……？」

改めて尋ねると、顔を赤くしたモモは視線を宙に彷徨わせる。俺も顔もモモと負けず劣らず赤くなっていることだろう。

「……よ、よろしく願いますっす」

「っつして、休日にモモと遊びに行くことが決定した。

……一応、デートってことでいいんだよね？」

西二局『遊びに行こう〜お誘い編〜』（後書き）

というわけで次回はついにデート回だ！

ただし！ 鶴賀以外の原作キャラ登場回にもなりそうだけどね！

まだ書けてないので予定は未定。

西三局『遊びに行こう〜デート編〜』（前書き）

前回、原作キャラの登場回になると言ったな。

アレは嘘だ。

というか、書いてるうちにそこまで行かなかった。計画せずに気の向くままに書いてた結果がこれだよ。

西三局『遊びに行こう〜デート編〜』

『デート』という言葉を、某日本で有名な分厚い国語辞典で探してみる。

デート【date】

- 1、日付。時日。
- 2、日時や場所を定めて異性と会うこと。あいびき。「彼女とする」

今回注目すべき点は、1ではなく2。日時や場所を定めて異性と会うことを指す言葉である。そしてその次の言葉、あいびき。漢字変換すると、逢引である。合挽きではなく、逢引である。

(逢引……デートかあ)

そんな全く持って無駄なことを考えながら、俺はモモと遊びに向かうために、身支度を整えるのだった。

咲・Saki・《風神録》

西三局『遊びに行こう〜デート編〜』

モモとの集合場所は、近所の駅前。ただ片田舎のここら辺の駅前だ、ハッキリ言って栄えていない。というか、この近所には俺たちが遊ぶような場所は一切無い。ということ、遊びに行くということ

大体電車に乗って街まで出て行くことになるのだ。

「……九時半、か」

約束した時間は十時だから、三十分前に到着する事が出来た。ひっそりと設置されたベンチに座ってモモを待つことにしよう。

「……お？」

と、思ったのだが、どうやら待ち人は既にいたようだった。

肩口まで届き、やや目にかかっている黒髪。やや緊張した様子の固い表情。女の子の服装にそこまで深い知識と語彙が無いために詳しい表現は出来ないが、白のワンピースに黒のジャケットに身を包んだモモがベンチに座っていた。

「おはよ、モモ」

挨拶をしながら駆け寄る。俺が来たことに気付いたモモは、強張っていた表情を緩め、笑顔になった。うん、相変わらず可愛い。

「おはようっす、御人君」

「悪いな、待たせちゃったみたいで」

女の子を待たせるとは何たることだ。いくら女の子（ゆみ姉を除く）と一緒に遊びに行ったことがないとはいえ、流石にそこら辺のマナーは弁えてるつもりだ。

「全然大丈夫っすよ。私がわざと時間より早く来たんすから」

へ？

「その、私の存在感って薄いじゃないっすか。だから、今まで集合場所で待ってても気付かれないってことがほとんどだったっす。けど、御人君ならきつと気付いてくれるから、ちよつと待つ人の気持ちを味わってみたかったんすよ」

こつこついうのもなんかいいっすね、と照れたように笑うモモ。

ヤバイ、超可愛い。

なんかこつこつ、ギュツと抱きしめたい衝動に駆られるが、流石にそれをやって許されるほど俺とモモは親密ではないから自重する。というか、例え親密であっても男女でそれはやったらいかん。……ゆみ姉だったら苦笑しながらも許してくれるような気がしないでもないけど。

「でも待たせちゃまったことには変わりないからな。昼飯でも奢るよ」

「そ、そんな、悪いっすよ。私が勝手に早く来たのに……」

「気にしなさんなっす。こんなところでぐらいカッコつけさせてくれ」

普段の対局でも全然カッコいいところを見せれないし、好きな女の子の前ではカッコつけたいのだ。

「……普段も結構カッコいいっすよ？」

何やら顔を赤らめたモモが何かを呟いていたが、顔を赤らめたモモも可愛いなあなどどうでもいいことを考えていた俺にはその内容は耳に入ってこなかった。

(……何やらとっても重要なことを聞き逃したような気が……?)

まあ気のせいだろう。

十

電車で揺られること大体三十分前後、俺とモモは隣町までやって来た。ここまで来ると流石にビルなどが立ち並ぶ街といった感じになってくる。大抵新作のゲームやら漫画やらはここに買いに来る。……周りの奴らはここまで来ずに某密林通販で買ってるらしいけど俺はパソコン持ってないんだってば。千五百円買えば送料無料ってどういうことだよ。わざわざ千円以上払ってここまでの往復切符買ってる俺に謝れ。

「さてと……」

これからどうしたものか。結局ノリだけでここまでモモを連れてきてしまったため、特に何をするといいたことを一切考えていなかった。かといって誘った自分がモモに聞くのもあれだし。はてさて、どうしたものだろうか……。

悩みながら歩いていると、隣を歩くモモが声をかけてきた。

「あの、御人君」

「ん？ 何？」

「ちょっと行きたいところがあったりするんですけど……いいですかね？」

モモの方からそう申し出てくれるとは、逆にありがたい。

「もちろん。今回はモモへのお詫びも兼ねてるんだから。やりたいことがあるならドンドン言ってくれ」

「えっと、じゃあ場所が分からないから案内してもらいたいんですけど……ゲームセンターって何処ですか？」

……ゲーセン？ こう言ったらアレかもしれないが、モモがゲーセンに行きたがるとは思ってもよらなかった。とりあえずゲーセンの場所は知ってし、結構行ったことはある。格ゲーが苦手な俺にとつてゲーセンはメダルゲーやプライズゲーをすることで場所なのだが。

というか。

「都合のいいことにここがゲーセンです」

駅を出てから適当に歩いていたら俺たちだったのだが、ちょうど目の前がゲーセンだった。というわけで早速入店である。

自動ドアを潜り店内に入ると、ゲーセン特有の騒音にモモが若干顔をしかめた。ゲーセン来るの初めてか、それとも慣れてないか。

「それで、ゲーセンで何かやってみたいゲームでもあった？」

「？」

どうやら騒音で俺の声が聞こえなかったらしく、モモはきよとんとした表情で小首を傾げた。こんな一挙手一投足をイチイチ可愛いと感じてしまう俺は本当にモモにベタ惚れなんだと思う。

「何かやってみたいゲームでもあったの？」

今度はちゃんとモモに聞こえるように若干顔を近づけながら再度聞く。

「……！」

ん？ 顔が赤くなった。なんだ？

「え、えっとつすね。その……プリクラっていうのをやってみたかったんす」

「……あー、プリクラね。……なるほど、プリクラか……」

なるほど、女の子らしいゲーセンに来る目的だ。

さてさて、結構昔からあるプリクラだが、昨今のゲーセン事情を知っている人なら知っているだろう、現在のゲーセンの何処にプリクラが置かれているのかを。

プリクラというのは、その撮影中は目の前のカメラに集中してし

まうため、足元への注意が散漫になってしまう。そのため、足元の置いたカバンの置き引きや、後ろから女性のスカートの中の盗撮などが問題となった。そういった問題を解決するため、ほとんどのゲーセンではプリクラの筐体を店内の一箇所に固め、その区域への立ち入りを女性に限定した。まあ全てのゲーセンでそのような処置を取ったかどうかは知らないが、少なくともこのゲーセンではそのようになっている。

それでだ、別に完全に男子禁制になっているわけではない。とある条件があるが、その区域に男子も入ることが出来る。その条件というのが。

「だ、男子はカップル限定っすか……」

これである。とは言っても、これを律儀に守ってる奴が何人いるか分かったものではない。何回か男だけでこの区域に入ってる奴らを見たことあるし。

さて、流石の俺もこの場面で「俺はここで待ってるから」と言っ
てモモを送り出すほど空気が読めないわけではない。こんな状況だ、
自惚れじゃなければ恐らくモモは俺とプリクラを撮ろうと思っ
てくれているのだろう。

「……えーっと……一応聞いておくけど、モモはプリクラを一人で撮りたいわけじゃないよね」

それでもちよっただけ不安なのでそう尋ねる。

「……………」

その質問に対し、モモは黙って頷くことで肯定してくれた。つまり、俺と一緒にプリクラを撮りたいと考えてくれているということだ。

「……はあ」

ならば、俺が取るべき行動は一つである。

「ま、こつのは深く考えなくていいんだって」

「ひゃ……！？」

むんずつとモモの手を握り、俺はプリクラコーナーへと足を進めていった。

……照れ隠しにした行動だったのだが、このとき初めてモモと手を繋いだんだよなあ……と、後に思い出して照れるのだった。

西三局『遊びに行こう〜デート編〜』（後書き）

ちなみに女の子とのプリクラは我がお姉さま（カワイイ）となら。

シスコンで何が悪い。

西四局『遊びに行こう〜出会い編〜』（前書き）

久しぶりの更新！

ようやく鶴賀以外の原作キャラの登場です。名前は出ないけど、まあ分かるでしょう。

西四局『遊びに行こう〜出会い編〜』

「エへへ……」

「……………」

先ほどからモモは花の咲くような笑顔を浮かべていた。その手には、今しがた二人で取ったプリクラを大事そうに携えている。

最近のプリクラは以前友達と撮ったときのものよりも随分と機能が増えていて、若干操作が大変だった。今のプリクラって字とかかけるんだな。デフォルトに備わっていたハートマークやらは流石に恥ずかしくて使えなかったが、それでもモモは「初プリクラ！」などと書いて随分と楽しそうだった。

ん？ 俺はどうだったかって？ そりゃもちろん楽しかったさ。狭い空間でモモと二人っていうシチュエーションはかなり気恥ずかしかったが、なんかこういうのもいいなと思ってしまった。……今度はモモと恋人同士になってから堂々とプリクラを撮ろうと、誰かに知られたら羞恥死しそうなことを考えながら。

その後も、二人で某ゾンビだらけのガンシューティングをプレイしたり（意外とモモが上手くて驚いた）、クレインゲームでモモの欲しがったプライズを五百円ほどで入手したり（ちよっと大きな猫のぬいぐるみ）、メダルコーナーでスロットを回して遊んだり（モモがメダルを入れた途端フィーバータイム）と、なかなか充実した時間を過ごすことが出来たと思う。

さてさて、そんな風に遊ぶことに夢中になっていると、案外空腹

というものは忘れ去られてしまうものである。いつの間にやら正午を過ぎ、一時近くになっていたことに気が付いたのは俺の腹の虫がレスキューコールを出してからだった。一度気付いてしまうとそのまま一気に腹は減っていくもので、モモも空腹ということでもとりあえず少し遅い昼食をとることとなった。

咲 - S a k i - 《風神録》

西四局 『遊びに行こう〜〜出会い編〜』

「さてと、何処で飯食うかね」

「私は何処でもいいですよ」

まあモモならそう言つと思つていたが。

ゲームセンターを後にし、再び駅前に戻ってきて二人並んでぶらぶらと歩いていた。こちら辺は食べる物屋が多いからこうして歩いていれば気分にあつたところが見つかるだろう。

そんなときだった。

キャプテンから離れるし！

「……ん？」

何処からかそんな声が聞こえてきて、思わずそちらに首を向けた。その声の発信源と思わしき人物はすぐに見つかった。丁度車道を挟んで反対側、真っ白な制服を着た少女二人と男二人が言い争っている様子だった。いや、言い争っているというよりは、男二人が少女二人に絡んでいて、それに少女が反発しているといったところだろう。

先ほど聞こえた声の主にして、今でも男二人に噛み付くように叫んでいる小柄な少女。体全身を使って威嚇する様はまるで猫のような印象を受けた。そんな少女の後ろに庇われるようにして立っている、キャプテンと呼ばれている金色の髪の少女。見た目の印象としては思わずその豊かな胸の膨らみに目が行きそうになるが、それと同じぐらいに常に閉じられている右目が何故か違和感のようなものを感じた。

「どうしたっすか？」

モモは急に足を止めた俺を不審に思ったのか、振り返りながらそう尋ねてくる。

「いや、何か女の子二人が絡まれてるみたいだったから」

ほらあれ、と車道の反対側を指差す。

「……女の子、っすか」

何故かモモの声の温度が三度ほど下がったような気がした。

その間にも四人のやり取りは加速していた。執拗に絡む男二人に対し、小柄な少女は徹底抗戦の構え。そんな少女の後ろでキャプテン（仮）はオロオロとしていた。何処からどう見ても「困っている人オーラ」が盛大に漂っていた。

「やっぱり、助けた方がいいよな」

完全に気まぐれだし、捉えようによつては偽善かもしれない。けれど、フェミニストとしてはやはり困っている女の子は放つてはおけない。ちなみに自分がフェミニストだってことには最近気付いた……ただ単にモモに甘いだけという意見は却下させていただく。

「……分かつたつす。御人君が差し伸べてくれた手にすぐわれた身としては、反対なんてできないつす」

協力するつすよ、とモモは頷いてくれた。

ほんと、ええ子やなあ……。

「よし！ それじゃあ早速プランBだ！」

「…… Aは何処に行ったつすか？」

そんなものではありません。

「というわけでプランB」一知り合いのフリしてその場から脱出フエイク・エスケープ』、その名の通り知り合いのフリをしてさりげなく救出する作戦である。古典的な方法ではあるが、一番簡単だろう。おまけに定番の男の俺一人ではなく、モモという女の子がいるので作戦の成功率は上昇していることだろう。

というわけで、早速作戦実行だ。

「あ、キャプテン、こんにちわー！」

「こ、こんにちわっす」

極力自然に、モモはその存在感の薄さも考慮してやや声を大きめに、少女二人に話しかける。

「は？ 誰だし、お前ら」

「……」

休日に偶然知り合いを見かけた風に投げかけた声は、少女の一言によってあっさりと切って捨てられてしまった。

「……タイム！」

俺たちと同じくように呆気に取られている男二人に待ったをかけ、モモを含めて四人で円陣を組む。

（何でここで乗らないの！？ 困ってるようすだったから折角人が

助けてあげようと知り合いのフリして声かけたっていうのに！

(はあ！？ そんなこと頼んでないし、分かるわけないだろ！)

(み、御人君落ち着くつす)

(か、華菜も落ち着いて。困ったことは事実なんだし、ここは素直に助けてもらいましょ？ ね？)

(……キャプテンがそう言うなら……)

(よし！ んじゃ、話を合わせてくれ)

作戦会議終了！

「待たせたな！」

「「お、おっ……」」

ノリと勢いに任せると、男二人は若干怯む。勢いってのは大事である。

「んで？ お前ら何なんだよいきなり」

「この二人の知り合いかあ？」

若干二人目の喋り方がうざいな。

「え、えっと、そう、先輩だ」

「先輩い？」

「そ、そう、俺の部活の先輩なんだよ」

「何処の高校だよお」

何こいつしつこい！ 喋り方うざい上にしつこい！ イチイそれ聞いてどうするつもりだよ！

（ほ、ほら、何処の高校っすか？）

フォローをするために後ろでモモがキャプテンさん（仮）に尋ねてくれている。

は、早く早く！

（か、風越女子です）

「か、風越女子だ！」

背後からそつと耳打ちされた高校の名前をそのまま口にする。

「「……は？」

「「「「……」

口にしてから気が付いた。風越女子。つまり、女子校である。

「……タイム！」

再び四人で円陣を組む。

(何で女子校なんすかあああ!!!?)

(「ご、ごめんなさい……!」)

(キャプテンのせいにすんなし!)

(け、けどこれはちょっとマズイっすね……)

(クソ、こうなったら実は俺は男装女子でしたという設定で押し通すしか……!)

(流石にそれは無理がありすぎるっすよ!?)

四人額を合わせてあーだこーだと言葉を交わす。

「おい、オメーらしい加減にしるよ」

「舐めてんですかあ? ああん?」

くそ、流石に二回も待つてはくれなかったようだ。

こうなったら最終手段だ!

「控えおろおおおおお!!!」

「「「「「……!?!」「」「」「」

俺が突然大声を上げたことに全員が怯む。怯んで一歩後ずさった

西四局『遊びに行こう〜』出会い編』（後書き）

というわけで、名前が出ないまま次回に続きます。

……鶴賀で一人出していない人がいたことをついさっきまでガチで忘れてしまっていた。

別に彼女のことを嫌っているわけではないです。おっぱい大好きです。

北一局『遊びに行こう〜帰宅編〜』（前書き）

小説を書く暇も読む暇も出来ない。おかげで未開封の小説が溜まりに溜まってしまった。

……べ、ベツニゲームシテルセイジャンイヨ？ レポートノセイダヨ？

北一局『遊びに行こう〜帰宅編〜』

「はあ、はあ……お、追ってきてないよな?」

「だ、大丈夫っぽいですよ」

「はあ……はあ……」

「い、いきなり走り出すんじゃないし!」

適当に走った俺たちは駅と反対側の公園までやってきた。背後から男たちは追ってくる様子はなく、どうやら撒いたようだった。やれやれ。

咲・S a k i・《風神録》

北一局『遊びに行こう〜帰宅編〜』

「はあ……はあ……」

「キャ、キャプテン大丈夫ですか?」

「あ、す、すみません、急に走らせてしまって」

キャプテン(仮)さんはいきなり走ったことで息が上がってしまい、膝に手をつけて大きく肩を上下させていた。しかし丁度いいこ

とに目の前には自動販売機が。というわけでポケットから財布を取り出し硬貨を投入。何がいいのか分からないから、適当に水、炭酸飲料、スポーツドリンク、お茶と各種選んだ。

「お好きなどうぞ。ご要望があれば買い直します」

「い、いえ、そんな、助けてもらったのに、こんな……」

「お好きなの、どうぞ」

経験上、こういうタイプの人は多少強引に持っていていかないとずっと遠慮し続けてしまう。だから多少強引に押し付けてしまった方がいいのだ。キャプテン（仮）さんは大分戸惑った様子であったが、最終的にはおすおすと俺の腕の中から水を抜き取っていった。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしました。はい、そっちもどうぞ」

「……まあ、貰っというてやるし」

少女 猫っばいから猫（仮）少女でいいや も炭酸飲料を抜き取っていく。

「はい、モモ、どっちがいい？ それとも買い直す？」

「じゃあお茶貰うっす」

全員に飲み物が行き渡ったことを確認してから、手元に残ったスポーツドリンクの蓋を開ける。

「あ、あの」

口を付けて飲もうとしたところで声をかけられ、そのままの姿勢で止まる。目線を動かすと、キャプテン（仮）さんがペットボトルを手にしたまま俺に向かって頭を下げている。

「先ほどは困っているところを助けていただき、その上に飲み物までごうしてご馳走になってしまい、本当にありがとうございます」

「……あ！ い、いえ……」

その驚くぐらい礼儀正しい（と言っては失礼があるのではと思うぐらい）対応に、思わず呆気にとられてしまった。隣のモモもお茶を両手に持ったまま若干ポカンとしている。

「今度お礼がしたいので、よければお二人のお名前と連絡先を教えてくださいただければ……」

「い、いやいや、そんなのいいですって。俺たちが勝手にやったことですし」

「私も御人君に頼まれて協力しただけっすから」

自己満足のためにやったことでお礼をされる筋合いは無い。むしろごうして綺麗なお姉さんとお話できただけで十分満足。

ゾクリ

「!?!?」

な、なんだ！？ 今何処から寒気が……お話というかオハナシ的な感覚が……。

「そ、そういえば先ほどからキャプテンって呼ばれてましたけど、何部のキャプテンさんなんですかね？」

話題転換にとそんな話を振ってみる。

「ええと、風越女子で麻雀部のキャプテンをさせていただいています」

「……へえ」

あの『名門』風越女子の麻雀部のキャプテンさんだったのか……。

「……じゃあ、またお会いする事になりそうですね」

「え……？」

横に立っているモモはどんな表情をしているのかは分からない。けれど、目の前のキャプテンさんと猫少女はニヤリと笑う俺に対して戸惑いの表情を浮かべていた。

十

日は既に傾き始め、窓から差し込んでくる夕陽に照らされながら

俺とモモは電車で揺られていた。

「またいつか会いましょう」

そんなことを言っただけで俺たちとキャプテンさんたちは別れた後、昼食を食べてから俺たちは結局夕方まで遊び続けた。ゲーセンに戻って再びゲームに興じ、適当に歩きながらウインドウショッピングをしたりと、いかにも十代の健全な男女の遊びだったと思う。……一人だと普段が普段だからなあ（部屋で漫画やラノベやゲームやネットサーフィン）。

「……ごめんな」

「え？」

「今日はモモにお詫びをするのが目的だったのにさ、なんか結局ただ遊んだだけになっちゃって」

しかも途中は無理矢理走らせて疲れるような真似をしてしまった。自分本位で連れまわしてしまった感が否めず、やはり申し訳なく思ってしまう。

「……そんなこと、私は気にしないっすよ」

しかし、モモは笑って首を横に振ってくれた。

「御人君と一緒にこうして遊びに行けて、それだけで私は今日一日楽しかったって思えるっす。……ほんと、誰かと遊ぶ楽しさなんて長らく忘れてしまってたっす」

そうポツリと溢すモモは、少しだけ寂しい目をしていた。

そんなモモの頭に、俺はポンツと手を乗せる。

「……これからも、もっと色々な場所に遊びに行こうな」

「……うん！」

こうして、俺とモモの初めての遊び……否、デートは幕を閉じたのだった。

+

「そういえば御人君、どうして一筒イチビンなんて持ってたつすか？」

「いや、なんか知らないけどポケットの中に入ってた」

不思議なことがあるもんだ。

北一局『遊びに行こう〜帰宅編〜』（後書き）

気がついたら、いつの間にか北場入りしていた。なんとか頑張って後三話で県予選編に入らなければ。

ん？ 主人公は男だから大会に参加できない？

大丈夫、問題ない。（訳：辻褄合わせの言い訳は出来ている）

北二局『バカと雀荘とメイドさん・前編』（前書き）

果たして年末までに何回更新できることやら。

とりあえず一つ言いたいことは、小説でデュエル考えるのって難しいね。遊戯王の二次書いてる人マジ凄い。

北二局『バカと雀荘とメイドさん・前編』

モモとのデートから数日後の出来事である。

「風祭いいいい！！ お前にお願いがががが！！」

「うおわ！？」

朝、何事もなく教室に入ると突然佐賀が叫びながらこちらに向かって突進してきた。思わず回し蹴りで迎撃してしまった俺は何にも悪くない。

「で？ こんな朝っぱらから何のようだ佐賀」

「相変わらず名前を間違えられてることや何の躊躇も無しに回し蹴りを放たれたことにいくつか言いたいことはあるが今はそんなことどうでもいい！ 風祭！ お前に頼みたいことがあるんだ！」

「…………頼みたいこと？」

本当に唐突だな。

しかし、こいつには以前『Default Player』探しのときにパソコン関係で力になってもらっている。いつまでも借りを作っとくのもあれだし、こちらで清算しておくのもいいだろう。

「まあ内容にもよるが」

「そうか！ じゃあとりあえず倒れた俺の背中を踏んだままの足を

退かしてくれ！」

「お願いって言うのはそれでオーケーか？」

「踏んだままでお願いします！」

自分でやっといてなんだが、変な趣味に目覚められても困るので足を退ける。

「んで？ お願いってのは？」

「ああ！ 風祭！ 俺を雀荘じゃんそうに連れてって！」

「……はあ？」

ウン十年前の映画タイトルのような佐賀の言葉の内容に、俺は疑問符を浮かばせざるを得なかった。

咲 - S a k i - 《風神録》

北二局 『バカと雀荘とメイドさん・前編』

次の週末、俺と佐賀は電車に揺られながら少し離れたとある町へと向かっていた。

何でも佐賀曰く 。

「可愛いメイドさんが一緒に麻雀を打ってくれるらしいんだよ！」

とのこと。

そのメイドさんを一目みたい。だが一人で雀荘に行くのも忍びない（佐賀は麻雀初心者らしい）。そこで麻雀部員である俺に白羽の矢が立ったということだ。全く、そんな情報何処から仕入れてくるんだか。

本当だったら今日はまたモモと遊びに行くつもりだったが、こいつとの予定を入れるために断念せざるを得なかった。というか、わざわざモモから誘ってくれたというのにこちらから断るハメになってしまった。

……とりあえずもう一発殴っても許されるんじゃないだろうか。

「いやー！ 本当に楽しみだな、メイドさん！ 何でも一人凄い巨乳ちゃんがいるらしいぞ！ 巨乳ちゃん！」

「えい！」

「うぼほあ！？ 可愛らしい掛け声と共に放たれた抉るようなコークスクリュー！？」

ホント、後悔だよ。

「……ようやく着いたか」

佐賀が言う件の雀荘は、最寄り駅から徒歩三十分の位置にあった。

「『麻雀 roof-top』か」

雰囲気としてはそこら辺にある小さな喫茶店と同じだった。ふむ、なかなか良さそうなところだな。気軽に来れる位置に無いから通うこともないだろうが。

「ここに巨乳メイドさんが……!!」

もう本当にこいつはどうしたらいいのだろうか。寧ろ生き恥であるこいつをこのままこの雀荘の中に連れて行ってしまっただろうか。ただの迷惑にしかならないような気がする。

「そういえば基本的過ぎて聞くのを忘れていたのだが、お前って麻雀のルールとか分かるのか？」

いくら目的が（不本意ながら）メイドさんとはいえ、麻雀が打てませんとなっては話にならない。

「応ともさ！ 今日メイドさんたちと麻雀を打つために一通りのルール、役、マナーその他諸々は完璧だ！」

「そ、そうか」

麻雀って結構覚えることが多いはずなのだが、そののほとんどを

覚えてきたというのかお前は。何というか、もう少しその努力のベクトルを別の方向へ向けることは出来ないのだろうか無理ですよね分かってます。

「んじゃま、行きますか」

鼻息荒い佐賀に若干引きつつ、俺は雀荘の扉を開けた。

「いらっしゃーい」

チリリンとドアベルの音と共に中に入ると、出迎えてくれたのはメガネをかけた……メイドさんだった。

「本当だったのか……」

「天パメガネメイド……それもまた良し！」

とりあえず後ろのバカは放っておいて、と。

「すみません、一見な上にこいつ初心者なんですけど、大丈夫ですかね？」

「そうですね？ まあ、勝つのは厳しいかもしれませんが、別に大歓迎です」

「だそうだ。よかったな」

「巨乳……！ 巨乳のメイドさんは何処に……！」

来たばかりでアレだが、もう帰りたい……。

ともあれ、雀荘に来たからには麻雀を打たなければならぬ。何処か空いている卓は無いだろうかと見渡す。しかし空いている卓は数あれど、丁度良く二人空いている卓は無かった。

「おい、咲！ 和！ お客さんじゃー！ 人数が足りんから卓に入ってくれー！」

どうしたもんかと考えていると、メガネメイドさん（仮）が店内奥にそう呼びかける。すると店の奥から二人のメイドさんが姿を現した。

「メイドさん来「黙れ」おごふ!？」

興奮して叫ぼうとするバカを先制して黙らせておく。

さて、二人の少女は、なるほど噂になるぐらいの美少女だった。片や長い桃色の髪の少女。その特徴は何と言ってもその大きく衣服を押し上げる胸元の膨らみだろう。小柄な体型にしてはかなり大きいその膨らみは、その目鼻立ちと合わせて確かに話題性は十分だった。もう片方の黒髪の少女は、桃色の髪の少女と並べてしまうとやや見劣りしてしまいそうだが、純朴そうな印象を受けるやはり美少女だった。

「わ、同い年ぐらいの男の子だ……」

「珍しいですね」

どうやらこの雀荘には学生があまり来ないらしく、二人は俺たちを見てそんな反応をしていた。

「何でも素人さんらしいんじゃない。練習にはならんじやろうが、まあ軽く打ってくれ」

天パメイドさん（恐らく立場的に二人より上）の言葉に、二人は素直に頷く。

「それで、お客さんはどれくらい打てるんじゃない？」

……今更だが、これは一体何訛りっていうんだろうか。東北？

そんなことを考えながら、そうですねと後頭部を搔く。

「まあそこそこ打てると思いますよ。これでも麻雀部の部員やっていたりするんで」

やや特殊な三角関係にはなっているが、まがいなりに部長と競り合ってるんだ。一般人よりは強い……と信じたい。未だにゆみ姉に勝てない現状ではそれすらも強く言い切れないところが悲しいところである。

「……へえ」

「麻雀部員、ですか」

ん？ 何だ？ 急にメイドさんたちの雰囲気が変わったような気がする。

「まあ、今回はこいつに合わせてある程度力抜いて打つんで、よろしく願います」

とらじつわげで、佐賀 + (メイドちゃん × 2) との対局である。

北二局『バカと雀荘とメイドさん・前編』（後書き）

というわけで、ようやく原作主人公&ヒロインの登場です。

時系列的には、カツ井さんに叩きのめされた後から合宿に行くまでの間。今度は本当に人手が足りないからとバイトを頼まれたという設定で。

果たして今作主人公と原作主人公の対局の行方は如何に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318x/>

咲-Saki-《風神録》

2011年11月30日00時49分発行